

北越雪譜 二編 終

					和書門
			三六五二六		類
	一	二	二	六	
	四	二	二	六	
七	冊	架	函	號	

庫	文	閣	内	
七五		三六五二六		和書
函		三		類
五	七	二		
架	冊	六		

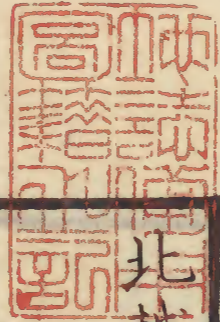
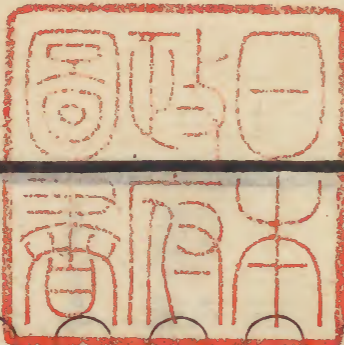
内閣文庫	
番號	和 36526
冊數	7 (6)
函號	175 78



北越雪譜二編三卷

目錄

- 鳥追槽とりおいさる 順列上下小
- 地獄谷の火ぢごくやのひ
- 無縫塔むほうた
- 年賀の哥ねがのうた
- 菅神御傳畧すがかみのみでんりやく
- 異獸いぶつ
- 弘智法印こうちほふいん
- 白鳥しらとり
- 浮嶋うきしま
- 美人びびと
- 雪霜ゆきしも
- 越後の人物えちごのじんぶつ
- 北高和尚きたかうわう
- 逃入村の不思議にげいりむらのふしぎ
- 田代の七ッ釜たしろのしちかま
- 火浣布かせんぷ
- 土中の舟どちゅうのふね
- 兩頭の蛇りょうとうのへび
- 石打明神いしうちあきかみ
- 蛾眉山下の標準かみまゆやまのひょうじゆん



雪譜二編卷之下

目 文英堂藏

○苗場山

○三四月の雪

○鶴恩小報也

通計二十三條

右異獸より以下分けて四の巻とき

○ 異獣の類
 ○ 鳥追櫓
 ○ 農家市中正月の行事
 ○ 小鳥追との事
 ○ 農家市中正月の行事
 ○ 小鳥追との事
 ○ 農家市中正月の行事
 ○ 小鳥追との事

北越雪譜二編巻三

越後

鈴木牧之 編選

江戸

京山人百樹 増修

○鳥追櫓

農家市中正月の行事小鳥追との事あり此事諸國より
 あま其あを処其国小よりてさむぐる事ハ諸書小散見せり江
 戸の鳥追との事非人の婦女音曲とるを女太夫とて木綿の衣服を
 うのうく着る顔化粧編笠をかむり三弦小胡弓などを
 あら賀唱をわたりうぐらひ門く小立り錢を乞ふ此事元日上
 りちどめ松の内をうぎりとを松を乞てもあつて所ありとを我
 越後小正月の小正月は正月の十五日ちどめ鳥追櫓とて去年より取除を
 たる山を雪の上小雪を以て高さ八九尺ありハ一丈余も高さ小

應^{おと}し^く末^{すえ}を廣^{ひろ}く雪^{ゆき}ゆ^て櫓^{やぐら}を築^{つと}立^たて^る不^ふ登^{のぼ}る^べぎ^{ざん}階^かをも雪^{ゆき}ゆ^て
 作り頂^{のうみ}を平坦^{へいへん}ふ^り松^{しょう}竹^{ちく}を四隅^{しごう}小^{せう}立^たち^あめ^を張^はり^とて^る廣^{ひろ}く^心小^こ
 む^の居^いる^べぎ^{やう}ふ^ちろ^を煮^にき^ある^べ小^{せう}童^{どう}等^らふ^のり^と物^を喰^くひ
 ろ^と遊^{あそ}び^鳥追^お哥^うを^うへ^るの^一ッ^小あ^のり^やど^こう^あつ^てき
 信^{しん}濃^{のう}國^{こく}と^ある^ぬの^ふろ^うあ^つて^きあ^のを^のり^てあ^つて^きあ^をを^ぬく^べぎ
 何^{なに}邊^{へん}の^とり^もか^のり^もな^らや^がと^やの^いく^し巴^は等^{とう}裏^ら
 早^{はや}苗^{なほ}田^{でん}の^さあ^たの^とり^らあ^つて^もも^めも^らど^りな^らや^がと^やの^いく^し
 雀^{すずめ}鳩^{とむ}可^か立^たい^くら^ら
 あり^ひか^の掘^{かり}揚^{あげ}山^{やま}を^あり^ての^上小^{せう}雪^{ゆき}を^以て^四方^{はう}あ^る堂^{だう}を^作り^たて^る雪
 む^の物^をを^ちぎ^ぎ棚^{たな}を^もつ^りち^ろを^煮き^つて^給あ^べや^んせん^んん^ん杯
 此^こ雪^{ゆき}の^棚小^{せう}あ^き物^を煮^ゆ焼^{やく}濁^ぬ酒^{しゆ}あ^どの^も小^{せう}童^{どう}大^{だい}勢^{せい}雪^{ゆき}の^堂小^{せう}あ
 と^あ遊^{あそ}び^同音^{どうおん}小^{せう}鳥^{ちう}追^お哥^うを^うへ^る日^ひら^ふゆ^きて^遊び^くる^をあ^れ
 暖^ぬ国^{こく}あ^るま^に正^{せい}月^{げつ}あ^そび^{あり}此^こ鳥^{ちう}追^お櫓^{やぐら}宿^{しゆく}内^{ない}ふ^りつ^とあ^り作^しり

堂をうへてあそぶ

○雪霜

前^{まへ}も^も志^しを^くり^しり^とど^ろ北^{きた}国^{こく}中^{ちゆう}小^{せう}越^{えつ}後^ご八^{はち}第^{だい}一^{いつ}の^雪国^{こく}あり^{その}
 中^{ちゆう}も^も魚^{うま}沼^ま古^こ志^し頸^{けい}城^{じやう}の^三郡^{ぐん}を^大雪^{ゆき}を^毎年^{ねん}一^{いつ}丈^{ぢやう}以^い上^{じやう}の^雪中^{ちゆう}小
 冬^{ふゆ}を^あそ^ぶも^も寒^{かん}気^き江^え戸^こ小^{せう}さ^まま^らる^る夏^{なつ}あ^り江^え戸^こ小^{せう}寒^{かん}中^{ちゆう}せ^り
 人^{ひと}り^り五^ご雜^ざ組^{ぐみ}ふ^り霜^{しも}ハ^露の^もそ^ぶ所^{しよ}ふ^り陰^{いん}あり^雪ハ^雲此
 ろ^を所^{しよ}ふ^り陽^{やう}あり^とふ^むぶ^りあ^り雪^{ゆき}中^{ちゆう}あ^まも^も夏^{なつ}の^備ふ
 時^{とき}る^野菜^{さい}の^もも^も雪^{ゆき}の^下小^{せう}萌^もれ^どその^用を^あそ^ぶ夏^{なつ}の^備ふ
 冬^{ふゆ}の^たが^ひあ^まも^も暖^ぬ国^{こく}あ^るる^る夏^{なつ}あ^りその^邊き^とハ^三月^{げつ}小
 ち^とめ^り梅^{うめ}の^花を^見五^ご月^{げつ}の^瓜蒞^{しや}子^しを^初物^{はつぶつ}と^山中^{ちゆう}小^{せう}あ^りて^ハ
 山^{やま}櫻^{おう}の^さり^り四^し月^{げつ}の^もも^も五^ご月^{げつ}あ^りる^所も^ある^{あり}

○地獄谷の火



此書の前編上の巻雪中の火といふ条に六日町の郡魚沼西の山手小
 地中より火の燃事燃をあるが地獄谷の火の夏をいふが
 火の燃事。おと我越後小名高く七不思議小かぞへる蒲原郡
 如法寺村百姓莊七兵衛孫六が家小あり地中より燃事火ハ普く
 人の知事所あるごとく其火より盛火あるハ魚沼郡のちちの小千
 谷の在地獄谷の火あり唐土小曼を火井といふ近來此地獄谷小家
 を作り地火を以て湯を燂客を待て浴さしむ夏秋のそとめ
 まで遊客多し此火井他国中ききき越後小多し先年蒲
 原郡の内或家より井を掘し其夜医師來りて井を掘し夏
 を聞家小飯る時挑灯を井の中へ入るとのありしとき井を見し立
 きりし井中より燄火をいづ火勢さうん燃あがりけり近
 隣のものども火事ありとてをつけ井中より火のものを

此井を掘しぬる此火ありとて村のものども口く小主人を罵り恨
 けしが主人も此火をおそとて埋るると此地火ハ陰火といふの
 如法寺村の陰火も微風の気いづる小燄燭の火をきき風氣平小應
 て燃事陽火を得き燃を寛文のむし莊右門如法寺村庭より韃を
 注ひする時より燃事いづとて前小井中の火も医者挑灯を
 井の中へいづぬる陽火いづぬるいづる事ありとて又頸城
 郡の海辺小能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山平小入る夏
 二里より小間瀬口といふ村ありこの農家小地火をいづとて夏如法寺村
 の地火小同とて此より用水小いづる所あり旱のをりハ井小就
 井を掘小堀り水を得了夏ありある時井を掘り横小とり時究の闇
 きをてをたぬ小炬を用ひつる小陽火を得て陰火忽ち狀あがり人曼
 々為小焼死しけるとて曼等の夏どもをいづる小越後のちちの地

火をいざと火脈の地多るいざ陽火を得どく發せざるも多る

百樹曰余小千谷小あり一時岩居余小地獄谷の火を見せんと
社友五人を伴ひ用意の酒食を笑奴二人小荷り余京水と同
行十人小千谷をさるる西の方・新保村・敷川新田をいふ村々
を歴く一宮といふ村の山間の蒙畦曲節々茲小抵行程一里半
可あり是日こと小快晴し村落の秋景百逞目を奪ふさて平山
一ツを踰る坡あり別地獄谷といふの徑あり坡の上より目を下せば
一ツの茅屋あり是本文小い混堂あり人々坡の半小い一時
茅屋の樓上小四五人の美婦ありいさおのく檻小よりて遙小この
人々を指もありありい笑ひあはれ名をよびあはれ手をうらたさ
あはれハ手をあげてまわく四面皆山ゆく老樹鬱然とく弱塞の

中、小個美人を見ること愕然、是裡小あゝとんばあゝとんば、狢あゝん
といひけま、岩居友ざらと相顧、手を拍て笑ふこと、小千谷の下と
町といふ所の酒樓、小居る酌、株の哥妓どもあり、岩居朋友と計り、
竊小此小招まき、余小與せん為と、渠ハ狢小あゝとんば、岩居
小魅さきと、さるるあり、已小地獄谷小く、皆樓小の、岩居ハ余と
京水とを伴ひて、かの火を視せしむ、そもく、茲谷ハ山櫻多り、
ゆゑ櫻谷とよぶるを、地火あるを、りて四方四五十歩、六尺を、
平坦の地とあり、地火を借りて浴室とあり、人の遊ぶ所とせしむ、とを
櫻谷とよぶる、地火のたれ小地獄とよぶること、花ハまき、
る、
り、
より火の燃事、常の湯屋の火より盛あり、上小釜あり、一間
四方の湯槽あり、細き篋あり、右の山の清水を引き湯槽小

と湯ハ槽の四方ハ溢るといふをりて此湯温くも熱くも
 天工の地火盡る時あはれ人作の湯も盡る期あり見ゆも清潔
 ある事ゆゑに此混堂小續きく厨処あり灶あり穴あり地
 火を引く物を意新小同ト次小中の間あり床の下より竹箆を出
 一口ハ一寸をり銅を鉗て火を出さしむ上より自在をさげ此火
 小酒の烟をありあり茶を煎夜ハ燈火をさえ熟此火を視ふ
 箆をさるること一寸をりの上小燃る厨小あはげバ陽火のむく小
 消る箆の口小手をあててさるむ少く風をうらむものと数燭の
 火を翳せば忽然とくもゆることとをドめの如く主の箱が白この火
 夜ハ昼よりも燥烈く人の顔青くもゆることり箱が妻水のうち
 よりゆる火を見せゆきんとく混堂のうら小僅の山田あり所
 小りり田の水の中少く一湯とある小つけぎの火をうらし

小水中の火蠟燭のゆゑが如く左邊からく此火のやうあり
 処やうあり夜小いさぐとく火をゆきぬとく多敷きとく
 りり余が江戸の目小視る所とく奇妙あり唐土小此火
 を火井とく博物志或ハ瑯琊代醉小見えたる雲臺山の火井も
 此地獄谷の火のごとくも事ハ洪大なる此谷の火小勝らば
 唐土と日本とをりて火井の最第一といふ一見を見たる事
 越遊の一奇観あり唐土小火井の在る所北の蜀地小属と日本の
 火井も北の越後小在り自然の地勢小よるやん・さて一人の
 哥妓様上小いさぐり小山石居を呼ぶとく小樓小のやまり
 余ハ京水とく小此湯小浴を樓上小早く三弦をひくせり浴
 をりり小樓小のやまり既小杯盤狼藉たり嬋娟哥妓袖をつり杯
 素手弄糸朱唇謡曲迦陵頻伽の声外面如芥の色真を添まら

地獄谷遠然極樂世界とるより此妓どもを養ふ主人もこの小
 來り居る從る料理人小具一なる魚菜を調味させさう小
 宴を開く是主人俗中小雅を挾ぐ恒小文人を推慕ゆあ小是
 日もこの來りて余小面識するを岩居小約せしと此人觀る
 のあ自ら双坡樓の家号をその滑稽此一をりて知るべし飄逸
 洒落かしくとく人小愛せしる家の前後小坡ありとぞ双坡の字
 下し得て妙あり双坡樓扇をいづて余小句をむふ妓も持し
 扇を出て京水画をる一余即真を書きこきを見し岩居を
 せどめあめく壁小句を題し更小風雅の真をまかりたりかて
 やり日も傾きけしと婦路を促しけし小哥妓ども草鞋めく來
 りしとてとるはらうぐのありとてはあはれとてを幸とて
 せまらざるも醉真あまは噪鬧し途を行く細流ある所小

いしとバ紅唇粉面の哥妓紅視を褰て沸了花姿柳腰の美人
 等しとじをよいて水をこするあど余が江戸の目め最珍らしく真
 あり醉客らんくをうとバ醉妓歩く躍る古繩を蛇と一駭せば
 とさささる妓悖りしと片足泥田あまのいと一を衆人駭然と此
 途ハ凡て農業の通路あるとバ憩之と茶店もあ半途小至りて
 古き社小入りてやせしと一妓社の后小入りて立ちつり石の水盤の
 沽る水を僅小掬手を洗ひし私小去りてあんとそのま樹下小
 立せ玉ふ石地藏芥の前小並びたちある懐中より鏡を出て鉛粉
 のとこころをけするをつくり唇紅をさして粧をるをこころの粧具を
 り小石佛の頭小置く外面女芥内心如夜又のしきりめあまは芥ハ
 あふとあひ玉やんとあつとあひ日も已小下晡あればあめくあを
 まめく小千谷あつとあひ北越旅談小をむ

正月鳥追櫓之図

正月鳥追櫓之図

圖中 山をあす所

此日 雪たのま



巽

新卒都未芳

華二月初鷺見

身奇白雪不嫌

遠を眺る守庭

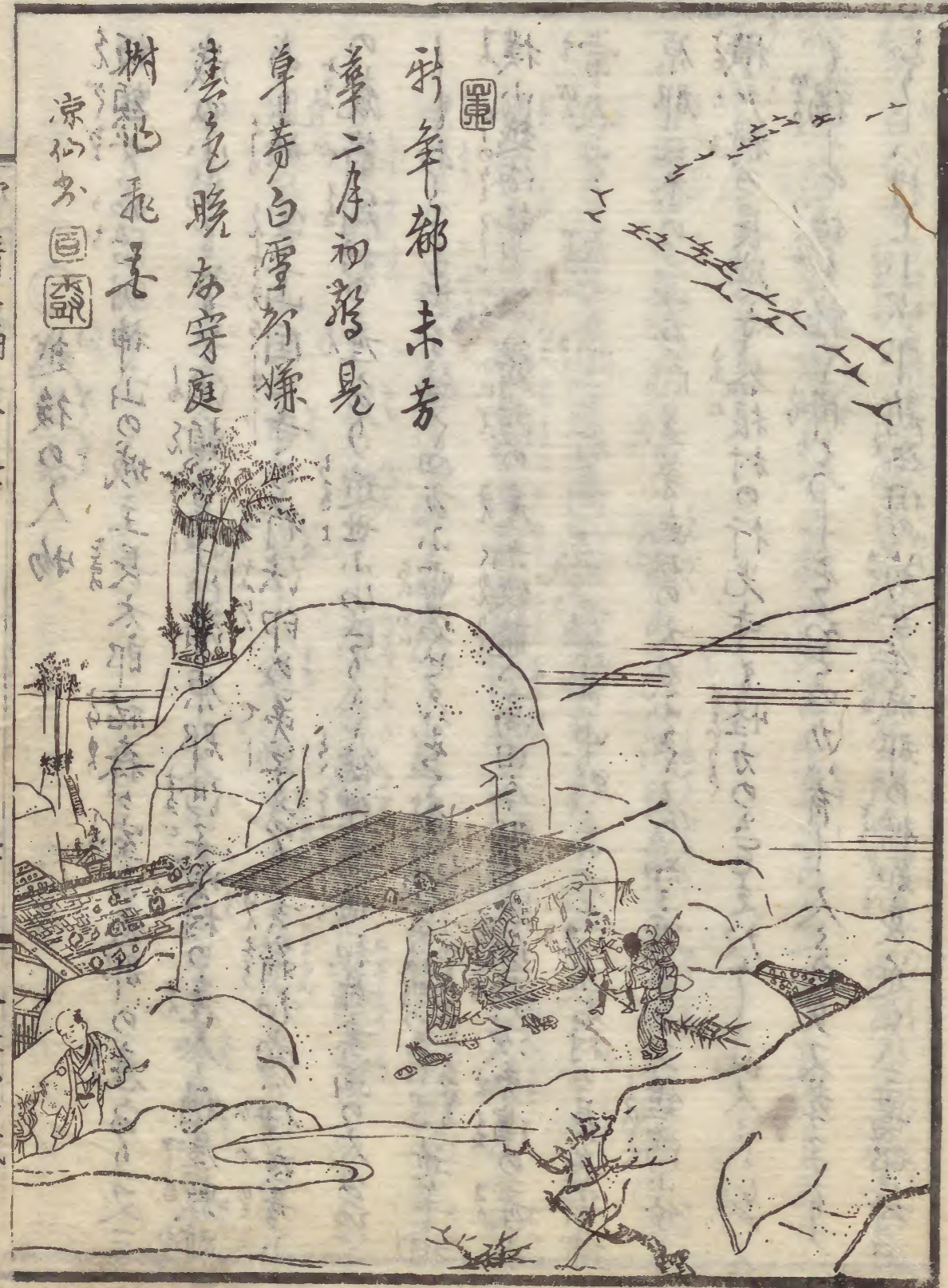
樹影花を

涼仙名

文溪堂

文溪堂

文溪堂



○越後の人物

板額女いんがくめ加治明神山かぢあけみんかみの城主じゆうしゆ長太郎ちやうたろう祐森すけもりが室古志郡むろこしぐんの産あり又三
 歳の小児せうじも知ると酒頼童子しゆんどうじ小蒲原郡こほむらげん沙子塚村さしづかむらの産今猶屋敷跡いまなほやしきあと
 あり始はじめハ雲上山うんじやま国止寺くにどめじの行法印ぎやうぽういんの弟子でしあり玄翁げんそう和尚おんがうハ伊夜彦山いよひこやま
 の麓ふもと箭矧村やんぎきむらの産あり近世ちんせい小いりり徳僧とくそう高儒かうにゆ和哥書画わがしやわの人あり小
 にもあつと遠く四方しやうほう小雷名こらいなせりきくは画人吳俊明ごしゆんめいのち江戶えど小し近年相ちんねんさう
 撲ま小越海こしやくうみ鷲しゆ濱はまハ新写しんしやの産九紋龍くもんりゆうハ高田今町たかたけいまちやうの産関戸せきとハ次弟濱じだいにの産也なり
 常人じやうじん少すくカ士の聞えありハ頸城郡くびきの中野善右門なくのぜんごもん立石村たちいしむらの長兵衛ちやうべゑ蒲
 原郡はらげん三条さんじやうの三五さんご右門みぎもん是等これら無双むさうの大力たからちからあり人の知る所しるしよあり又鑑かん写しや小近こぢんき
 横戸村よことむらの長徳寺ちやうとくじ谷根村やふねむらの行光寺ぎやうこうじも怪力かいりきのきをえたり此人このひとハいりり
 も獨ひとりく鐘かねを軽かろく掛かるつ掛かるつもやりの力ちからあり一人ひとりあり又孝子かうじありハ
 村上小次郎むらかみせうじらう新癸田しんゑいでんの菊女きくめ頸城郡くびきの僧知良そうちらう近くハ三嶋郡さんしまぐん村田

村むらの百合女はくげいめ百姓ひやくしやう伊兵衛いべゑ新癸田しんゑいでん荒川村あらかわむら門左門かぢざもん百姓ひやくしやう豆賣まめうり春
 松まつ鎌かま々々蒲原郡ほむらげん釈迦塚村しやくぢやづかむら百姓ひやくしやう新六しんろくいりり孝子かうじの名一国ななひとくに小高こたかかりき今
 存在そんざいもありとや

百樹ひやくじゆ曰いひ余われ越後えちご小いりり板額いんがくありハ酒頼童子しゆんどうじの旧跡きうせきをたぐり新
 写しやをも一覽いちらんあり名の聞えり神佛しんぶつをもをりたてり寺泊てらどまり小いりり
 順徳帝じゆんとくていの鳳跡ほうせき義経ぎけい夢因むいん国師こくし法然ぽうぜん上人じやうじん日蓮にちれん上人じやうじん為兼たかかね卿けい遊女うでめ初
 君等きみらうの古跡こせきもたぐり小越後こしやくご小入りりり氣運きうん順じゆんを失うしな
 小年せうねん稍しやう儉けんり穀こくの價ねん日にち小躍せうやく人ひと氣穩きうんあり心歸こころかへり家いへ小ありり
 風雅ふうがをうしりり古跡こせきをも空くうりり過あやり惟平ただひらりり旅人りきよじんとありりり
 おびりり文雅ぶんがの人ひとをも刺問さしもんりり今小遺いませうい感かんあり嗟あは乎や年の儉けん
 せりりりんせん

○無縫塔

寺の近く小川あり早出川といふ寺より八町むらり下小観音堂ありその下を流る所を東光が淵といふ永谷寺(入院の住職あり此淵)血脉を投げ入る事先例ありさて此永谷寺の住職遷化の前年此淵より墓の石小るる圓き自然石を一つ岸小出た是を無縫塔と名づけつゝ此石出たはその翌年必住職病死する事むらり今ふらり一度も違ひたる事あり此墓石大小小より住職の心小應せぬ淵(之せぬその夜淵逆浪)住職のこの石を淵小出た事度あり先年凡僧ら小住職一此石を見て死を懼と出奔せり小翌年他国小ありて病死せりとぞおのふ此淵小灵ありと天然の死を示せある友入北洋主人蒲原郡見隣書をくす件をの寺を覽る話小本堂間口十間右小庫裏左小八間小五間の禅堂あり本堂ふらり阪の左り小鐘樓あり禅堂のうらり小蓮池あり

上小坂あり登り住職の墓所ありかの淵より出らる圓石を人作の石の臺の脚ありふのせ墓とを中央あるを関山と左右小次第々々三基あり大なる徑一尺二三寸むらり八九寸六七寸ありもあり大小和尚の徳小應せぬといふとと墓の高さ六尺むらり一尺むらりありと語らむさかの淵小灵ありといふむらり永光寺のやとり小貴人何某住玉ひ小その内室色情の妬あり夫をうらと東光が淵小身を沈め冤魂悪竜とあり人をも身しを永光寺の関山名をき血脉をうの淵小あつて化度玉ひゆ急悪竜得脱ありその礼とかの墓石を淵小い死期を示せ是以今ふらりても入院の時ハ淵小血脉を沈むと寺説小つてを○さて我が隣國信濃も無縫塔の事あり近江の石雲根志ふらり前編異之部信濃国高井郡法湯村横井温泉寺の前小星河と幅三町むらりの大河

あり温泉寺の住僧遷化の前年小此河中へ何方よりともあり高さ
二尺をよりある自然石の方小くうつろく石塔一ツ流きまきつる実り
彫刻せるごとくあり天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へあ
せり事ありきらあり翌年住僧遷化あり則ち小此石を立す九代
以前より始りし九代の石塔同石同様あり少くも違はず並び
あり或年の住僧此塔の出る時天を拜しといの我法華千部讀
經の願あり今年ふり満り何とぞ命を今年延し玉へと念
トてこの塔を川中の洲小投こたり何事もなく一年すきく千部
讀經のすきし月小件の石又川中ふあり其翌年をじり遷化
ありとこの次の住僧塔の時何の程かひもあらず洲へあげこり
幾度あげあめり其夜そのよふいなり翌年病死ありしとぞ
此辺あり是を無帽塔と名づく以上一條の全文越後小永光寺信濃小温泉

寺事の相似し一奇怪といふ。○百樹曰牧之老人が此草稿を視
て無縫塔の縫の字義通トぐ誤字あやとて劃示し問ひけ
る無縫塔と書傳ふるよりいひぬ雲根志の無帽塔とあり
無帽の字も又通トぐあやとく無望塔あやあん住僧の
心あり死がしやさ小無望塔あづり小無誓の一笑を記し博
識の確拠を録つ

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一あり四大寺と云滝谷の
慈光寺村松小村上の耕雲寺伊弥彦の指月寺雲洞村の雲洞庵
あり十三世通天和尚ハ霜臺君の謙信の事親藉あり高徳の聞え
今も口碑小のとなり景勝君も此寺小物学び玉ひしとて一国の
大寺あり古文書宝物等も多しその中小火車落の袈裟と

いふあり香深の麻と見ゆる小血の痕のときり是を火車落とく
 宝物とくる由來ハむり天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひ一
 学徳全備の尊者ゆくりせり其頃此寺にありた三郎九村の農家
 小死亡のいのあり小時も冬の雪ありつぎ雪吹もやまざりけり
 三四日晴をもちて葬式をのぞりる小晴ざりたり強きといふ
 をあり且那寺のまづ北高和尚をむり棺をいづ親族ハさうこ
 人々蓑笠小雪茂あぎて送りゆくその雪途もや半小のりし時猛風
 俄小ちり黒雲空を布滿て闇夜のそつぐともあり火の玉飛来り
 棺の上小覆かり火の中小尾ハあまたる稀有の大猫牙をもちし
 鼻をもち棺を目づけるとんと人々をこきを見り棺を捨おけり
 まろびつ逃まらふ北高和尚ハをりも恨まらるる口小呪文を唱
 大声一喝一鉄如意を擧ぐ飛つ大猫の頭をうち玉ひふかから

やゆとらん血やごりいり衣をけり妖怪ハ立地小逃去りけ
 る風もや雪もをもち事あり葬式をいとありけり寺の
 旧記ハのときり此時めらるるを火車の法衣を今ふつふ
 百樹曰余越遊一塩澤ハ在り時牧之老人小伴と云洞庵ハ
 いり塩沢より庵主ハも對話ありかの火車のりの袈裟といふ物
 その外の宝物古文書の類をも一覽せりいりも大寺あり祈禱
 の二字を大書し堅額ハ順徳院の震筆ありと云佐渡ハ延
 震筆門前小直江山城守の制札あり放火私伐を禁むるの文あり
 庭中池のわたり智勇の良将宇佐美駿河守又死の古墳在り
 先年牧之老人施主とて新小墓碑を建てり不朽の善行也
 いり本文ハ火車といふ所謂夜又まづ一夜又の怪ハ
 唐土の書ゆもあつて散見せり

○羊賀の哥

余六十一還曆の時年賀の書画を集む吾国いささあり諸国の文人
 三都の名家妓女排優來船清人の一絶をも得たりとる牧之小贈と
 りの更をさるるあり人より入ふもあへ千餘幅ふおづり帖とほこ
 藏をひらき世是を風入とさるるの鋪ふつきたる坐しきの障子をむしき
 年賀の帖を披き並べおる所へ友人來り年賀の作意書画の評
 あどくすのめづるをりし頃礼の夫婦軒下小我が里言ひの立けり吾が家
 常小草鞋をいつくせむかゝる者小施をゆゑをを錢をあらふ
 此頃礼の翁さまとてとる年賀の帖を心あるさぬ見れり
 云やういふはどあつらひも頃礼の腰をさ成申さんたんざう玉り
 とのめを食のやうめさつらひ似気たさるものおつらひと思ひ
 ろがう短尺まづりむしけりけり
 三途川とて先百半も君がむしむをさるりやん
 五放舎

とさるる一なるふでのまじびも拙くを年賀あらむとやからり
 趣向といひ頃礼小五放舎と戯まてる名もむしりく友人と俱おど
 ろた威し宿を施行せんやうのどろせんあど友人もさるる
 まりよれと杖をとめびくえさるりけり国ハ西国とをりり
 ろるものめてやありけん

○逃入村の不思議

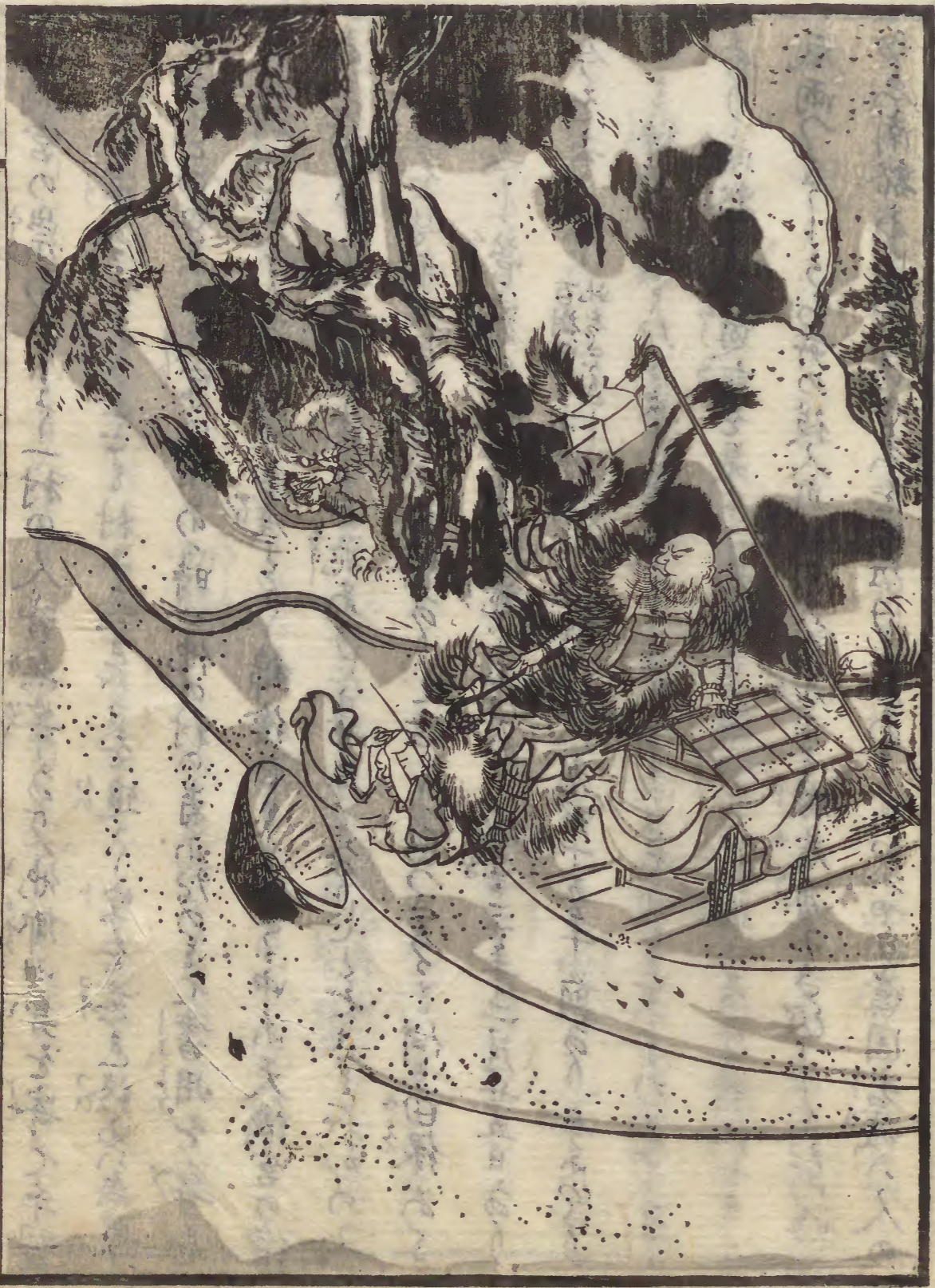
小千谷より一里あまりの山手小逃入村といふあり此村小大
 塚小塚とよびく大小二ツの古墳双びあり所の傳ふ大なるを時平の塚と
 小なるを時平の夫人の塚といひ時平大臣夫婦の塚此地小在あき由縁なき
 こゝの論小むらがる俗説ありあつたども爰小一ツの不思議ありそのふ
 ぎをわむむしり時平小ゆりの人越後小流さるるごとく此地小終り
 くるやあんとその不思議といふ昔より此逃入村の人手習をせむ

北高禪師勇氣圖



聖賢子孫卷下

文溪堂藏



聖賢子孫卷下

十三

文溪堂藏

天満宮の崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷に身を寄て手習
をまじり崇ありとていふことども村のうらまひ日を追ふ字を忘る終に無筆
とあるこのゆゑ小文字の用ある時ハ他の村の者かたのてて書用を弁む
又此村の子どもと江戸土産とて錦繪をのびする中ハ天満宮の繪
わらわらとて神の崇りの兆ありし事度々ありしとてさきさきかの大
塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くはいつても何れ由縁あり
事あるべし管家の抗紫ゆゑ薨じ玉ひつるハ延喜三年二月廿五日あり
今を去る事百樹曰く今今といひハ牧之老人が此まじりたる文政三年をいふあり九百十五年前あり今ふいつ
ても神天の明くたる事あるべし尊むべしさて又さきさきの事
あり南谿が東遊記を見ら小南谿東遊記津輕小居る時六七日も
風雨つぎつぎとて所の役人丹後の人や居ると旅店毎ふさびつたつて
ゆゑ南谿あはれ小そのゆゑを問ひけりあつてゆゑ當国岩城ハ人の

ありとて安壽姫對王丸の生国ありさきさきむの一人此御あつてを岩城山
の神小まつりて社今小在り此兄弟丹後小さるよハ三庄太夫が為小困苦
するゆゑ小丹後の人をいささかハ丹後の人此国小入るゆゑ大風雨有て
日をこする事むりよりの事あり丹後の人此国の塚をいづるハ風雨なら
まらむゆゑ小丹後の人や居ると捜まありとつりて南谿子此事小過
りてとて記せり右小ハ兄弟の父岩城判官正氏在京の時諺小あひこ
家の亡びるハ永保年中の事あり今をさる事むりて七百五十余年之
兄弟の怨魂今小消滅せざる事人知を以論むる百樹曰安壽ハ對王が妻ありは塩尻
廿二巻小終り終考
西遊記前編景清が塚ハ日向小あり世の知る処あり其母の塚ハ肥後国水麻
の人吉の城下より五六里ほど東切幡村小まつりて此所小景清が娘の墳も
あり一村の氏神小まつりて此村まじりて盲人を忌む盲人他処より入る
必崇あり景清後小盲人小ありしゆゑ母の盲人を嫌ふとて所の人の

りト記せりこととの変逃入村の不思議小類せりあることども件の
二ハ社ありて丹後の人を忌墓ありて盲目人をさらふあり逃入村と
墳あるゆゑ天満宮の神霊此地を忌玉つらんをのり考ふるふ
かの古墳はいよぐ時平が血脉の人あり

百樹曰余越遊く小千谷不在り時所の人逃入村の事を語
りてこの古墳を見玉へ案内まじりていひて管神のい玉ふ
所(文墨の者強くゆくまゆもあはれ話なき)のまゆゆく
がりきさて天神様といはば三歳の小児も尊び時平ときけは此
御神を諺言一たる悪人ありとて其悪千古不上下く哥舞妓
狂言の作りあり婦女子も普く知所あるとて童稚女子ハその
實跡を志するが稀ありさきぶかざるをあら冊子此
御神の事を記さるゝかといはれど逃入村の因ふよりて

書載を

○謹で案る小菅原の本姓ハ土師ありて土師の古人といひて
光仁帝の御時大和国菅原といひ所小住するゆゑ小土師の姓を菅
原不改らる管神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼とやたてまつる
余が考あれども文仁明帝小仕(玉ひする文章博士參議是善卿の第三の
長けはとふそと)仁明帝小仕(玉ひする文章博士參議是善卿の第三の
御子兼和十二年小生と玉ひり七歳の時紅梅を御覧とて「梅の花
紅脂のいろを似さる哉阿古が顔中もゆべりけり」十一の春(齊衡)父君
より月下梅との詩の題を玉ひする時即坐小月輝如晴雪花似
照星可憐金鏡轉庭上玉房馨 御祖父(清)御父(是善)の学業
を受嗣玉ひて文藝ハさうあり武事ゆも疎くまじりてなり
○清和天皇の貞観元年御年十五ありて御元服同四年文章生小
拳ら且下野の權掾なるせらる同十四年御年廿八御母伴氏身

まり玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身ま
 玉ひ御年此時 管神八御年四十あり(寛平四年御年四十八
 類聚国史二百巻を撰玉ふ和哥ハ管家御集一卷詩文ハ管家文章
 十二巻同後草一卷後草ハ筑紫
此の御作多今も世小傳ハ大納言公任卿ハ詞詠集ハ
 入とてこの管家の詩ハ「送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花
 若使詔先知我意 今宵旅宿在詩家」此御作ハ 延喜帝のま
 東宮より時令旨ありて一時の間十首の詩を作り玉ひる其一ツ
 あり○ま御若年より數階を歴ひて後寛平九年御年五十三
 權大納言右□將を兼らる此時時平大納言小任せと左□將を兼
 管神と並び立ち執政なり此時大臣の官ありしゆ大納言の執政
 なり此年七月三日 宇多帝御位を太子敦仁親王(讓り玉ひ朱雀
 院)入らせ玉ひ亭子院より奉り御法体ありて 寛平法皇とて

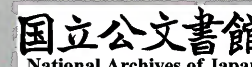
中奉る 敦仁親王を醍醐天皇とも後よりハ延喜帝とも奉る
御年
十三 年号を昌泰と改元を同二年時平公左□臣 管神右□臣
 相俱ふ 帝を補佐し奉る時小時平公二十七 管神五十四兩公
 左右の□臣とも方徳年齡双壁をなす故小心齟齬し相
 和せども 管神の詭毒を得玉ふの張本あり○ともく 時平公ハ
 大職冠九代の孫照宣公の嫡男ありて代々□臣の家柄ありとの
 ありとて 延喜帝の皇后の兄ありとのゆゑ若年小□臣の貴
 重小職しあり此人の乱行のつを言ハ叔父たる大納言国経卿ハ年
 老叔母なる北の方ハ年若く業平の孫女ありて絶世の美人あり時平
 是小意を夫夫人もまの夫の老なるを嫌ふの心あり時平或日国経の
 許小宴し 醉興おほききく夫人を貫んといひて 国経も醉
 戲言とみゆりて 夫人を貫んといひて 国経が醉卧するを見と叔

母を車小い入る立つり此腹小生とるを中納言敷忠といふ
 時平の不道此を以て其餘を知つてかゝる不道の人あり
 寛平法皇の御心小時平の任を除き管神御一人小国政
 をまうせ玉りんとあがりあり小延喜元年正月三日
 帝亭子院へ朝覲のをり御内心を示し玉ひ小帝も小
 小ふさか玉ひ其日管神を亭子院あめ大事のよりを
 内勅あり小管神固辞しなむ小許し玉ひさりけり
 同月七日後二比密事いふ小時平公の聞ふ事小先
 帝小説もやうの君の御弟齊世親王の道實の女を室
 通し電遇厚し是以君を祭し親王を立国柄を一人の手
 小握んと密謀あり法皇も是小應下玉の風説ありと
 言を巧小説しけり時小延喜帝御年十七あり皇太后ハ

時平公の妹あり内外より讒毒を流し若帝の御心を動し
 奉りしあり○さて時平が毒奏し中り同月廿五日左降の
 宣旨下り右臣の職を削り從二位いりごとく太宰權師と
 文筑紫へ左遷不定り玉り寛平法皇此事を聞り大ふを
 ろるの御車も玉り玉りを俄小御指をせり玉ひ清涼殿
 小立せ玉ひ斯とやせとあやせありしごとく左右の諸陣警固し事
 を通せ是も時平の讒一味も管根の朝臣がとるひとや
 法皇の草坐玉ひ終日庭上小御し本院へ還り
 玉り○管神小御子二十三人あり御男子四人四方へ流し玉ふ
 是も時平の毒舌小より姫さる都小より幼きふり筑
 紫へまゝのり年頃愛玉ひる梅小へ別ををりなむひと
 東風吹く白ひをせよ梅の花さる春を忘れ此梅つくり

飛ぶ事六拳世の知事あり又櫻を「桜花主を忘るゝものありふ吹
 らん風ふふ」とつるせよ」○斯く延喜元年辛酉二月朔日京の高辻の
 御館をひて玉ひて津の国須磨の浦小日を移すつゝ人抵りたまへり
 御館をひて玉ひて津の国須磨の浦小日を移すつゝ人抵りたまへり
 又兩の目「るの朝かゝる人もあけとやきそ〜ぬき長ひるより〜もあき
 又兩の目「るの朝かゝる人もあけとやきそ〜ぬき長ひるより〜もあき
 つ〜ふ〜ふ〜ふ〜玉ひてふ不出門行といふ詩を作り玉ひて
 寸歩も門外へいへ玉ひて是朝廷を尊恐御身の謫官たるをつゝ
 たりのあゝあり御向ふ「都府樓後看尾色 觀音寺只聽鐘声」
 〇管神延喜元年二月朔日都を出玉ひて筑紫へいり玉ひて
 月あり是より前の御詩文を管家文章といひ十二卷左遷より後

のを管家後草とく一卷今も世につゝ後草ふ九月十三夜の題
 して「去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今
 在此 捧持毎日拜餘香」此御作ふ注ありその趣ハ〇去年とハ
 昌泰三年あり延喜元年其年の九月十三夜清涼殿ふ時候あり
 時秋思といふ題を玉ひて小詩の意ふこととせと諫たてまつりふ
 其いさめを容玉ひよるこゝせひひて御衣を賜ひるを此配所ふ
 へり〜毎日御衣ふのとりたる餘香を拜まると帝をまへ御恩状
 忘る玉ひて御心の誠を作り玉ひるあり此一詩をゆつとも無
 實の流罪ふ所〜露をうりも帝を恨み玉ひるしを知る〜朝
 廷を怒る〜魔道ふ入り雷公ふあり玉ひるといふ妄説ハ次ハ
 舟ま〜〇高辻の御庭の櫻枯よりとき玉ひて「梅ハ飛梅ハか
 世の中ふ松むり〜〇まへ太宰府小謫居ふ事



三年トモト小トモト延喜三年正月の頃より 御心例ミココトヨありて二月廿五日
 太宰府トモト小トモト薨トモト玉トモト御年五十九御墓ミタ六府トモト小トモトちトモトさトモト四トモト辻トモトといふ所
 小定トモト御棺ミツツをトモトいトモトづトモトるトモト途トモト中トモト小トモトちトモトまトモトりトモトくトモトるトモトをトモト別トモト其トモトのトモト所トモト小
 葬トモトをトモト奉トモトるトモト今トモトのトモト 神トモト廟トモト是トモトありトモト。延喜五年八月十九日同所安樂寺
 小始トモト菅神の神殿を建トモトらトモトるトモト味酒ミヅの安行ヤスヨクといふ人是をうけ
 たりトモト同九年トモト神トモト殿トモト成トモトるトモト是トモトよりトモトさトモトきトモト四人トモトの御子ミコ配流セウリウをトモトりトモトさトモトすトモト
 玉トモトひトモトかトモトのトモト故トモトの位トモト小トモトちトモトさトモト玉トモトふトモト。神トモト去トモト玉トモトひトモトのトモトちトモト水旱ミヅノ風雷カミの天
 覆トモト志トモトをトモトくトモトありトモトるトモト人トモトの心安ココロうトモトるトモト是トモトぞ 菅公ミヅノの崇トモトりトモトるトモトんトモトるトモト
 風説トモト去トモトけトモトるとトモトや。○菅神ミヅノ薨トモト去トモトより七年トモト小トモトあトモトりトモトく延喜九年
 四月トモト左トモト○臣トモト藤原トモト時平トモト公トモト薨トモト去トモト歳トモト三十九又トモト一男トモト八条トモトの大將トモト保忠トモトその
 弟トモト中納言トモト敦忠トモトむトモトびトモト時平トモトの女トモト延喜帝トモトの孫トモトの東宮トモトまトモトもトモト相トモトつトモトきトモトて
 薨トモトせトモトらトモト又トモト時平トモトの諛トモト毒トモト小トモト荷トモト膳トモトをトモトるトモト菅根ミヅノの朝臣トモトハ延喜八年十月

死トモトをトモトこトモトしトモトりトモトの事トモトどもトモトをトモトも 菅神ミヅノの崇トモトありトモトとせトモト小流トモト布トモトせトモトハ
 菅公ミヅノの冤トモト譴トモトをトモト世トモトの人哀トモト戚トモトきたトモトりトモトゆトモトえトモトとトモトや。○延長元年三月保
 明トモト太子トモト薨トモト去トモト 時平の孫まへ 東宮とのひりき ○同年四月廿日贈位正二位本官の右トモト○臣
 小復トモト一玉トモト 神さりのひり ○一条院の御時正曆四年五月廿日
 菅神ミヅノ小正位左トモト○臣トモトを贈トモトらトモトるトモト 菅神百年 御忌ある ○同年閏十月十九日
 大政トモト○臣トモトを贈トモトらトモトるトモト此トモト 御神ミヅノの御位トモトハ正一位大政トモト○臣トモトとトモトまトモトすトモト
 後トモト年トモト屢トモト 神トモト灵トモトの赫トモト々トモトたるトモト徴トモトありトモトくトモトふトモトよりトモトて 天満宮トモト或
 自在トモト天神トモトの贈トモト称トモトありトモト○とトモトもトモトく 醍醐トモト天皇トモトハ在位トモト百廿代トモトの御皇
 統トモトの中トモトもトモト殊トモト小御德トモト達トモトよりトモトゆトモトえトモト延喜トモトの聖代トモトと称トモトし御在位トモトの
 久トモトりトモトゆトモトえ 延喜帝トモトともトモト奉トモトるトモト 御若冠トモトの時トモトとトモトりトモトるトモト賢者トモト
 の聞トモトえトモトあるトモト重臣トモトの 菅公ミヅノを時平トモト大臣トモトか一時トモトの諛トモト口トモトを信トモトし玉トモトひトモトて
 其實トモト否トモトをトモトもトモト礼トモトし玉トモトひトモトを奉トモト示トモト小菅公ミヅノを左トモト迁トモトありトモトハ御一代トモトの

失徳とやいふべきありを 管神の恨と玉ひざりハ配所の詩哥小
 てもあつゝ 管神ハうらむ玉ひざりも賢徳忠臣の冤謫を天のい
 きどわりて水旱風雷の異変讒者奸人の死亡ありしらん俗子ハ是
 を 管神の怨灵ととるハ是又 管神の賢行小瑾つけありあられ
 ども竊小謂く賢者ハ旧悪をかりむといふも事小こそよき冤謫
 慄愁のあまり讒言の首唱する時平大臣を肚中深く恨と玉ひ
 しもあつゝ本編小の逃入村を神の忌玉も其徴ととるの
 一ツあるべし 〇神去り玉ひよりサ八年の後延長八年六月廿六日
 大雷清涼殿小墮て藤原清貫 大納言 平稀世 右中 其外時候の人々
 雷火小即死を 延喜帝常寧殿小渡御ありて雷火を避たすハ
 是をも 管神の祟ととるハいふ 非説ありと安齋先生 伊勢 平藏の
 管像辨ともいふ 〇太宰府より一里西小天拜山あり 管神小の

山小のかりて朝廷を怨む告文を天小捧と祈り雷神とあり
 玉ひとらふハ賢徳の御心を志とる俗子の妄説を今小傳へた
 あり和漢三文苗會小も實一カ小記一カハ不出門行の御作ハ
 心を深めざるあやわん 〇法性坊尊意叡山小在一時 管神の
 幽灵來り我冤謫の夙懃を償とを願くハ師の道力をりて拒こと
 ろれ尊意曰平土ハ皆王民あり我ハ皇の詔をうけ玉ひとを
 避る小所あり 管神作色あり 適柘榴を薦 管神哺を吐く
 焰をう玉ひとらふ故事ハ元亨釈書の妄説小起 此書ハ今天保
 十年より五百
廿年前元亨二年東福
 寺の虎関和尚の作あり 奇怪の事を記すハ佛者の筆癖ありと安
 齋先生もいふ 〇白太夫といふハ伊勢渡會の神職 管神文墨小於
 格外の懇友ありゆゑ小北野小祀り今も社あり 此御神の事を作
 りたる俗曲ハ梅王
松王櫻丸の名ハかの梅ハ飛の御哥ふ
 よりくまらけいなる名あり 〇北野の御社の始ハ天慶五年六月九日より

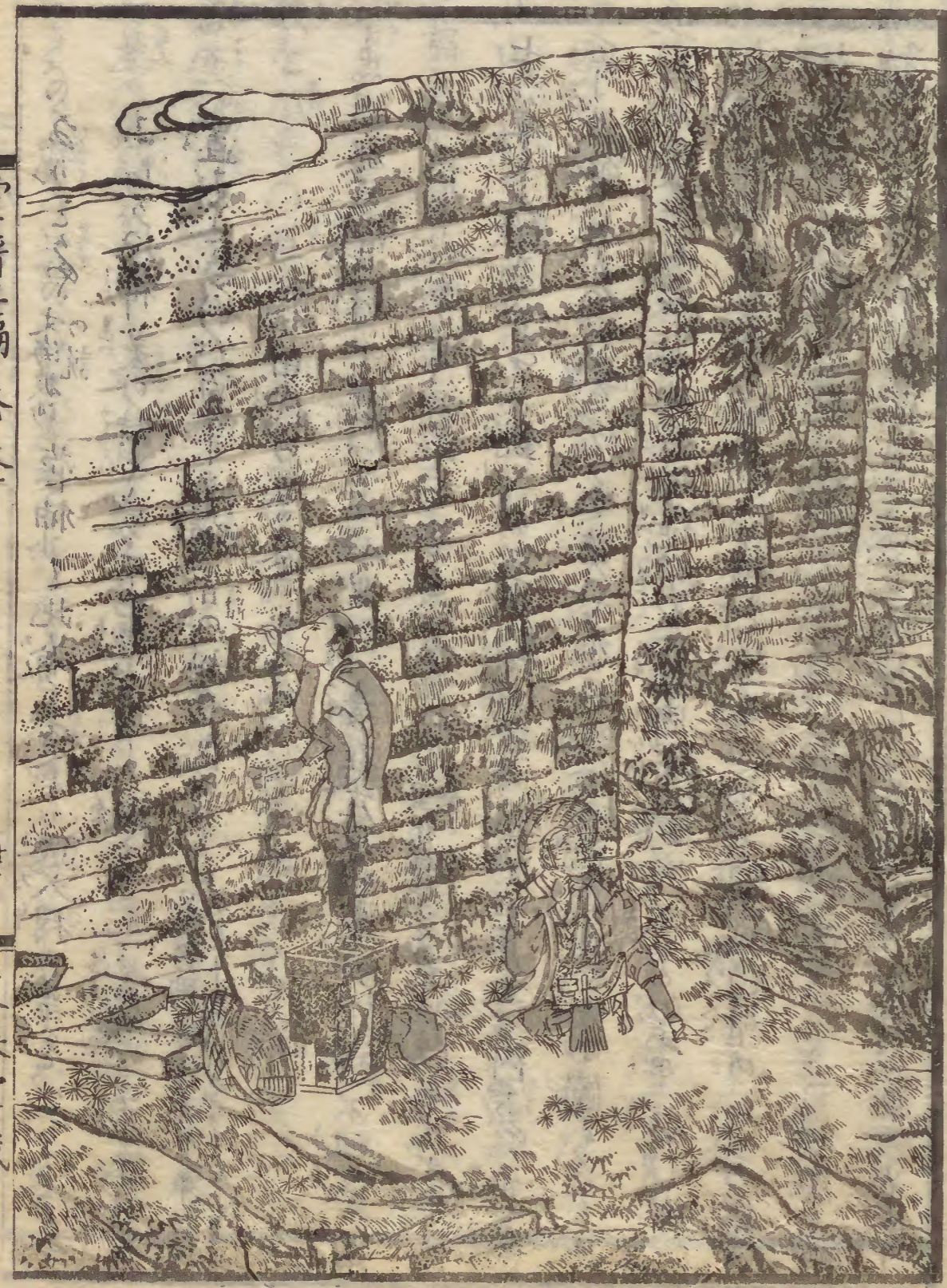
勅命ふよりく建創其起り西の京七條小住する文子との女小神
 説ありふよりくあり 北野縁起 ○世ふ渡唐の天神とらひて唐服小
 梅花一枝を持玉ふを画く故事ハ佛鑑禪師 聖一國師とあり名を東福寺の開山國師の始祖
 博多小住玉ひする跡の地中より掘いごする石小菅神の灵唐
 土へ渡り玉ひて徑山寺の無準禪師 の師あり 法を受玉ひて日本へ
 歸り玉ひると件の石小彫つけありと古書小見えたるを拠とす
 渡唐の神影を画き傳へるあり此事固妄説ありと安齋先生の
 菅像辨小り 菅家聖唐傳啓といふ書の附録小沙門師嵩が ○菅神
 左遷の實跡を載するハ日本紀畧 抄録小卷序の扶桑畧記卷三 ○日本史
 百の列傳 五十一 ○菅家御傳記 神統菅原陳經朝臣御作そのよきまよえんが
 なる古今の書籍 抄録小卷序の扶桑畧記卷三 ○本朝文粹小奉する大江匡衡の
 文小「天満自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人 帝の御と 或日月於天

上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也 云大江家ハ
 菅原家と俱小 朝廷小累世する儒臣ありある小 菅神を出宗
 称する事件の文の如く是以凡文道小関者此 御神を崇あがぎ
 んや信ぜざらんや ○およそ 菅神を祀る社ありわがくハ雷除の護
 府といふ物あり此 御神雷の浮名をうけ玉ひするゆゑ 神灵雷
 を忌玉ふゆゑ小此まかりするを験あるべし ○さへ如件條説するハ
 本編小いり逃入村の 神灵の事小因ちかぎ實跡の書とを摘要し
 て御神の畧傳を見費小示せあり 固ちかぎ不学のまをるまをる要跡の
 漏るるも説の誤謬たるありありと謹心附記を ○再按る小
 孔子の聖なるもその灵ハ生る時より照然とすその墓十里
 荆棘を生せども鳥も巢をむまがを関羽の賢るも死してハ神と
 ありて祈小應を是則生ハ形を以て運り死てハ神を以て運る也

七ツ釜之図

雪詩二編卷之十

文溪堂藏



雪詩二編卷之十

廿二

文溪堂藏

ありとくや 丈海披沙 菅神も此論不近 逃入村の事を以ても千年
ふちうに神神の赫くくうを仰あくア 敬うやふア 蓋冥はくあ六年月を
置おむとまけバ百年も猶な一日の如くあるア
菅公の神神も此論不近 逃入村の事を以ても千年 小多一まのたをそらまわり

○田代の七ッ釜

魚沼郡の官驛官驛 十日町の南七里計 妻在庄の山中 此へんまア 小田代といふ
村あり 村を去事七八町ふ七ッ釜といふ所あり 里俗滝つたを 滝七段あり
七ッ釜といひきこまり 鉤子の口不動滝ありいふも七ッ釜の内あり妙景
奇状筆をのりて云々ぞ第七番目の釜の地景を爰小圖せるを
其大槩をあるア 此所の絶壁を堅御号横御号といふ里俗伊勢上
り御師の持きこるもいひ箱をかかうさまといふ此絶壁の石の箱の
状ふ似るをのりて斯いふありその似たりといふ此せのへきの石とこの
落るあるを視まふ厚さ六七寸計ふく平まあり長さ二四尺をり

長短いひとくぞ石工の作りゆさうが如く 此石数百万を堅小積重めて
此數十丈の絶壁をあると頂ハ山ふつぎて老樹鬱然たり是右の方の
堅御かうあり在り此石の寸尺ふたがびる石を横小積るこり數十
丈をるを事右小同ドとのさぬ人ありて行儀よくつとあげらるごとく
寸分の斜なり天然の奇工奇く妙く不可思議あり此石の落たるを
此田代村の者さるぐの物小用ふ片石も他所小用ふまバ崇あり
事度くありとむ余文政三年辰七月二日此七ッ釜の奇景を尋て目
撃したるを記す天の范くする他国も是ふ似する所あるべし姑くその
類を示す ○百樹曰余仕不在一時同藩の文学関先生の話ふ
君侯封内の丹波山 天然磨の状ある石をつとあげて柱のゆうある
を並て絶壁をなす 満山此石ありとくさる又西国の山ふ人の作りたる
かりある磨の状の石を産する所ありと春暉が隨筆よく見らる事

ありき今その所をなむひりごきど

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著する鏡紫記行巻の
 九小但馬國多氣郡納屋村より川船をり但馬の温泉小抵る途
 中を記しする條小曰。猶舟小のりて行。右の方小愛宕山宮島村
 野上村石山地名あり追續あり此石山の川岸小臨る所小奇き
 石あり其形ち磨磐の如く上下平ふりて周ハ三角四角五角八角
 等小く石工の切立り如く色ハ青黒し是を掘出しする跡ありて
 洞のどらう天下の廣きあり珍奇ある事ありきものありけり
 是も奇石の類ありて筆の次小きもの

北越雪譜二編卷之三終

